

沢庵禪師における人間観について

笠井 哲

一 はじめに

沢庵禪師（一五七三～一六四六）は、徳川家光の相談役も務めた禪僧であるが、將軍家の指南役・柳生新陰流の柳生宗矩（一五七一～一六四六）の心の師であり、「劍禪一如」の思想でよく知られている。そういう彼は、人間をどのように捉えていたのだろうか。「劍禪一如」ばかりが注目され、彼の人間観については、従来十分に論じられて来ることがなかったといえる。そこで本稿では、沢庵禪師における人間観を考察することを目的とした。沢庵には、自然や人間の道理について説き、人生のあり方を示した『玲瓏集』という著作がある。この書において、月日が過ぎ行くことが旅にたとえられている。沢庵は、李白（七〇一～七六二）の次の詩を引用している。

夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。而して浮世は、夢の若し。

観を為すこと幾何ぞ。古人燭をとりて夜遊ぶ。良に似あるなり⁽¹⁾。

この詩の意味するところは、「天地は生滅たえない万物の宿屋である、流れて返らぬ時は永久に過ぎゆく旅人にもひとしい。そしてこの世は夢のようにはかない。歓をつくすことはいかほどの間であろう、古人が燭をともして夜も遊んだのは、まことにもつともである」ということである。

沢庵は、この詩を引用しながら、次のように解説を加えている。物とは、木や石のように情のない物だけを用いではなく、人をも物といっている。この現実の世界は、物や人が生きかう旅の宿のようなものであり、物と人とは少しの間もとどまることがない。月日の過ぎゆくことは、旅人が通り過ぎてとどまらぬようなものである。春夏秋冬と次第に過ぎゆくことは、百代の間も変わることはない。

この身は夢のようで、あると見えて、覚めてみれば、あとかたもない。そして夢みる間も、どれほどの時なのか。だからこそ、昔の人が夜を日について、燈火をかかげて夜遊んだのも、理由のないことではない、というのである。

人生は旅の宿のようなものだという。確かに生を受けて死ぬま

で八十年、百年といつても、それは大宇宙の生命の長さに比べる
と一瞬に過ぎない。一時の夢に過ぎない。では、その人生とは如
何なるもので、われわれは如何に生きるべきであらうか。

二 欲と無欲

沢庵は、人間の欲望というものを直視している。『玲瓏集』に
おいて、次のように述べている。

欲と云ふ、只財宝に付て、金銀所望に思てのみ、欲と云ふに
非ず。眼に色を見るも欲也。耳に声を聞くも欲也。鼻に香を
嗅くも欲也。一念わづかにきざすも是を欲と名づく。此身は
欲を堅めて、作り出せる也。人皆欲につよき事尤道理也⁽⁹⁾。
すなわち欲という場合、これはただ財産や金銀を欲しがること
だけを指すのではない。眼が物を見るのも欲によるのである。耳
が声を聞くのも欲である。鼻が香をかぐのも、やはり欲によるの
である。少しでも何かをしようという思いが芽生えるのも、欲が
あればこそである。すなわち、眼・耳・鼻・舌・身・意の働き全
てが、欲だということである。

そのように見れば、人間の身体は欲の固まりとしてできあがっ
たものであり、そのため誰でも欲が強いのは当然のことである。
しかし、欲で固まった身体のうちにも無欲の本性が潜んでいるの
である。ただし、常に血気にかくされて、その働きが外に現われ

にくいのである。その上、この無欲の本性は守りにくく、外部の
あらゆる物事に応ずるために、他の六欲、すなわち眼・耳・鼻・
舌・身・意の感覚から生まれる様々な欲望に引きずられて、欲に
落ち込むのである。

さらに沢庵は、欲と五蘊との関連についても詳細に論じている。
我々の身体は、色・受・想・行・識の五蘊、五つの集まりから
構成されているという。

色は、この肉体をいい、受は、この肉体の感受する善悪、是非、
悲歡、苦樂などの感覚をいう。

想は、願望の意味である。悪を嫌い善を願ひ、悲しみを去つて
歓びを願ひ、苦を除き、樂を願う、その思いを想というのである。
行とは、先の受と想を身体で行うことである。苦しみを嫌つて
楽しいことを行ひ、悪を嫌つてわが身に善いことをする。ことをい
うのである。

識とは、先の受・想・行の善悪、是非、苦樂、悲歡を分別して、
悪を悪と知り、善を善と知り、苦を苦と知り、樂を樂と分別する
意識の働きをいう。

この識は、自分本位にして、醜を嫌い、美を好むのである。そ
の執着するところに従つて、動くこの身体を受けるのである。

この身体があるから受蘊があり、受蘊があるから想蘊があり、
想蘊があるから、これを行う行蘊があり、行を行おうとする行蘊
があるから、識蘊がある。

この意識によって、善悪、是非、美醜を分別して、何を取り何を捨てるかの想いが起こり、想いが起こるところ、そこに身体が生成されるのである。それは、太陽や月が水たまりに映るようなものである。仏も「物に応じて形を現わすこと、水中の月の如し」と説いている。

色・受・想・行・識と、識から色へと繰り返す循環を短縮して言えば、五蘊の連関は、十二因縁の流転によって、この身を受けたのだから、結局、識から始まるわけである。

沢庵は、識はすなわち欲である、と結論する。この欲、この識がこの五蘊からできていてる身体を生起させるのだから、この身体全体が欲で固まっている、といつてよいのである。したがって、髪の毛一筋を引っ張つても、たちまち欲念が起こり、指先に触つてもすぐに欲念が起こり、足の爪先に触れても欲念が起こる。つまり、身体全体が欲で固まっているからである。

それでは、人間の身体は、ただの欲の固まりなのであるうか。この欲で固まっている身体の中にも、まったく無欲正直な中心が隠されていることを沢庵は指摘する。この心は、色・受・想・行・識の五蘊の身ではなく、色も形もなく、欲というものもなく、中正にしてまっすぐなものである。この心を規準にして、すべての事を行う場合、それはみな義に適っているのである。これこそ、義の本体・本質である。

心は無欲なもの、正直なものだといひ、人間はこのような純粹

な心をもっていると沢庵は説くのである。このような沢庵の見解に従えば、人間は欲のみでなく、無欲の心を内に秘めているものだといえよう。

三 貪瞋痴の三毒

人間は欲の固まりだという沢庵は、さらに人間の欲の根源である三毒についても述べている。『玲瓏集』と同じように自然と人間の道理について説いた『東海夜話 上之巻』において、沢庵はまず業について、

一 業とは、万の人のなすわざ也^③。

といひ、次のように述べている。

その業に善悪があり、善を善業といひ、悪を悪業といふ。もともと、身口意の三業より万のわざが出てくるのである。身・三・口・意・三の名がある。殺生、偷盜、邪淫を身の三業、これは身になす三つの行いである。妄語、綺語、悪口、両舌を口の四業、すなわち口がなす行いである。貪欲、瞋恚、愚痴を意の三業、これは意識がなすわざである。上の身口意の三業の中で、身になすのを身業、口になすのを口業、意になすのを意業といふ。

身、口の二業も意を離れたはたらきではないから、要するに意業である。そこで貪瞋痴の三毒といつて、意業を一切の悪業の根本とする。

仏教では、人間の煩惱を三毒、貪り、瞋り、愚かさとしてとらえた。煩惱を毒に喩えたところが興味深い。毒を飲むと死ぬのと同様に、三つの煩惱はわれわれの精神を、死に至らしめる。三毒について中世、および近世の仏教者は実に明確に自覚していたおり、説法をする場合も、三毒について必ず説いているといつてもよい。

沢庵は、まず三毒の中の貪欲について、

貪欲より起つて、屋焼人殺をし、人の物を取りて、我私にせんとするより、千般万端の悪事もいづる也⁽⁴⁾。

という。すなわち欲より起こつて、家を焼き人を殺し、人の物を取つて自分の物にしようとするより始まり、千般、万端の悪事が生じるのである。

沢庵と同じく江戸時代のはじめに、武士から出家して曹洞宗の僧となり、「仁王禪」という勇猛なる禪風を確立した鈴木正三(一五七九〜一六五五)の生前の原稿を弟子が集録した『反故集』では、

貪欲より餓鬼道に入事、其理明也。貪欲より起所の念、一として正路なる事なし。先、兄弟・父子・夫婦の中にも、他の為を思事なく、唯我欲ばかりを思て、曾て他の恩を知事なし。(中略) 総して多欲の人は、人の善を嫉て、我足ざる事を恨むるものなり⁽⁵⁾。

という。すなわち貪欲、貪りの強い者は必ず三悪道の一つである

餓鬼道に落ちる。死んでから落ちるのではない。生きながら落ちるのである。貪る心が強いので、止める上にもさらに富もうとする。その欲心のため、自分の心を苦しめる。それが餓鬼道に他ならない。他人の善、他人の繁栄を嫉妬する。他人を怨む、そのために自らを苦しめてゆくのである。

次に沢庵は、瞋りについて、

瞋恚の怒より発りて、親子の間でも不礼不義をなし、兄弟朋友の間にも争をなし、切りつ切られつ、討ち討たれなんとするより、さまざまなこといづる也⁽⁶⁾。

といい、怒り腹立ちがもとになって、親子の間にも無礼不義を行い、兄弟朋友の間でも争いを起こし、切ったり切られたり、討ち討たれたりなど、様々なことが起こるというのである。

瞋恚については、鈴木正三もまた、次のように説いている。

瞋恚より地獄に入事、其理明也。瞋恚より起所の念、一として正路なる事なし。瞋の心強き人は、物毎に憤り強して、人を憎心甚し⁽⁷⁾。

という。すなわち、瞋りの心を持つと地獄に入るのだという。瞋りから発した心で正しい道にかなうものは一つもない。怒りの心の強い人は、あらゆる場合に憤りの心が強いために、相手を憎悪する。怒りっぽい人は、その人の本性が暗いために、人の恩を忘れ、仏神を敬う謙虚な気持ちがなく、兄弟・親子・夫婦の間にある親しみを忘れ、幼き子供に対しても愛情を抱くことなく、憐れ

みとか慈悲の心を忘却し、弱き者や貧しき者に対しても愛情を抱くことがないという。そのため、

少の事にも大なる怨を含み、他人の頸を切っても心猶あきたらず。非義に非義を重ね、我と我胸を焼て、自苦む事限りなし⁽⁸⁾。

となる。

怒りは他人と自分の心を焼き尽くさずにはおかない。怒りの心は人間のみに向けられるばかりでなく、非情である草木などにも向けられる。人間一生に一度や二度は、真に怒ることもあるであろう。しかし、平素は怒りの心を起こさないようにすることが、いかに社会生活にとつても家庭生活にとつても、必要であるのかわかる。もし怒りの心が生じた時には、観音様か阿弥陀様でも仏を念ずるとよい。あるいは、ひとときの坐禅をするのもよいかも知れないであろう。

また沢庵は愚痴については、

又愚痴は暗鈍なる故に理を知らず、万事につきて、ひが事を以て理となす也。理をもちては、ひが事に随はず、随はんを随へんとすれば、喧嘩におよぶ。此等は世間にありて人我相争ふ上の義也⁽⁹⁾。

といい、愚痴は暗く鈍いために道理を知らず、万事につけ間違ったことを道理とする。道理をわきまえておれば、間違ったことにはしたがうものではない。随わないのを随えようとすれば、言い争

いになる。これらは、世間において、人我すなわち身体の中に実体的に存在すると勘違いされた個人我の勝ち負けに熱をあげるからであるというのである。

鈴木正三もまた愚痴心については、

愚痴心より畜生道に入事、最分明也。愚痴なる人は物の理を知らず、唯我身を思念耳なるが故に、万事理に契事なし⁽¹⁰⁾。という。愚痴の多い人は畜生道に落ちる。愚かな人というのは物の道理がわからぬために、ただ自分のことだけを考えて生きる。是非分別をよくわきまえた人であっても我が身を思うのは当然であるが、愚かな人はその思いが甚だしいのである。物事の道理をしらないと、一体どういうことになるか。

他人のことを忘れて、自分のことだけ思う念が強いために、あらゆることについて、自分はよく、他人が悪いと思ひこんでしまうのである。自分に対する反省は寸毫もなく、すべてを相手の悪、相手の責任と決めつける。世界は自分を中心に回っているのだと錯覚する。自分の責任は一切問うことはなく、相手の責任のみを追及する。これを愚か者というのである。

現代では、幼少より自分の味方をするように育てられた過保護の者に、このような愚か者を見ることがある。こういう愚か者は、次のようであるという。

唯一切に付て我を立てて、人に勝ん事を本意とす⁽¹¹⁾。したがって、戦う心が強く休む時がない。たえずたかぶる心が強

いために自分は他より優れていると錯覚し、人を見下し、怒りを含み、胸中に猛火を燃やし、自分で自分の心を苦しめることになる。

四 迷いと悟り

仏教では、人間は迷いの世界としての三毒を持っている。この三毒は、修行により必ず取り除かれるものである。迷界と悟界とをあわせ持っているのが、人間なのである。

沢庵は『玲瓏集』において、十界と十如是について述べる。十界とは中国の天台教学で説く教えである。十界とは、迷界としての地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六趣と悟界としての声聞・縁覚、菩薩、仏の四聖を指している。十如是とはすべてのものが十のあるがまま（如是）の姿で生起し、存在するという見方をいう。この天台教学の教えを取り入れて、人間の迷界と悟界の真相を説いたのが沢庵である。

一 十如是弁。如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等のことである。十界。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人界、天界、声聞、縁覚、菩薩、仏界、十如是は、かくの如くと云ふ也⁽¹²⁾。

この十界にも、それぞれが十如是を具えていることを説くのである。すなわち、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人界、天界という六

つの迷いの世界と、声聞、縁覚、菩薩、仏の四つの悟りの世界と合わせて十界となるが、それぞれがこの十如是を具えているのである。

沢庵は続いて、十如是の一つ一つに丁寧な説明を加えている。第一は如是相である。およそ生物が生まれて来るには、相、すなわち姿、形がなくてはならない。これを如是相という。その相状は千差万別だが、相である点では同じである。相が変われば、その鳴く声も違って、時鳥は時鳥の鳴き声、鶯は鶯の鳴き声をす

る。第二は如是性である。相すなわちかたちある物は、すべて内に本性を含んでいる。仏性は平等であるが、姿、形はそれぞれ受け物によって違うのである。すべて生きとし生けるものは、ことごとく仏性を具えている、というように、地獄・餓鬼・畜生に生まれても、変わりがない仏性をそれぞれ受けているのであるという。

第三は如是体についてである。体とは法体、物そのもの、万有の本体である。何事にも体と用、本質と作用ということがある。雪や氷は用、水は体だといえよう。水が凍って氷となり、またとけて水に戻る。水は本体、氷は用である。これは、本体から様々な相を現わすが、相がなくなると本体が現われることに、たとえたのである。

私たちは、外に現われた相しか見ることができず、本体を見る

ことはできない。沢庵はこのことを、古人の歌を引用して説明している。

峯の雪、深山の水うちとけて、ふもとにさはく春の水を⁽¹³⁾

この歌の意味は「峰の雪や深山の氷がとけて、麓に音を立てて春の水が流れている」ということである。水が体、氷が用であることを詠んだものである。

次に、第四は如是力についてである。相と性と体具えていても、力ということがなくてはならない。力というのは、能きをする力ということ、すべての物事をする能力をいう。

夏山に木々の葉が青々と茂る中で、年中変わらぬ松の緑のとりわけ目立つのを歌にするのは、松の緑が時雨にも霜にも色を変えぬこと、冬の寒さにめげぬ操を持っていること、これを如是力と見なして歌を詠んだのである。

次に、第五は如是作についてである。作とは力によって、各々働くことをいう。今日一字を学び、明日一字をまなぶというように、たゆむことなく学べば、どのようなことも成し遂げることができる。「千里の道も一歩から始まる」というようなものだと詠んで、作の心を表したのである。

「千里の道も一歩から」というのは、『老子』「六十四章」に由来する言葉である。沢庵と同時代の劍聖・宮本武蔵（一五八四～一六四五）の『五輪書』の「水之巻」には、次のような言葉がある。

千里の道もひと足宛はこぶなり。（中略）千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とす⁽¹⁴⁾。

鍛錬という言葉の、鍛とは千日の稽古であり、錬とは万日の稽古なのである。それを武蔵は「朝鍛夕錬」という言葉で表わしている。朝、夕の不断の鍛錬によって死を厭わぬ境地がつくられていく。沢庵もまた、この宮本武蔵と同じような境地であったといえる。

次に、第六は如因についてである。因とは、以上説いてきた相・性・体・力・作のすべてを具えていれば、何事をするのも自由である、それが因である。それをしないのは、自分の欠点である。だから因縁がなくては、仏果すなわち悟りに至る道もない。因とは、因るという字である。その事に因って、これこれの事を得る、という意味である。

第七は、如是縁についてである。春、種子を土に蒔くことを因という。植えたからといって、雨露の助けがなければ、芽生え、成長することがない。雨露の助けを縁という。雨露の助けによって成長して、秋に実ることを果というのである。このように、仏になるうとするには、まず因を行わなくては、仏果には到達できない。修行という因を積んで、後に果としての覚を得るのである。第八は、如是果についてである。果には菓、すなわち木の実という意味がある。春に植えるという因によって、秋の実りを得る。これを仏果、仏の覚にたとえるのである。沢庵は次のような歌を

引用する。

出船は、わたのみさを過なまし、追手に成ぬ武庫の山風⁽¹⁵⁾。この歌の意味は、「港を出た船は、もう和田の岬を過ぎたことである。武庫の山風が、追風となつて」ということである。

船は因であり、風は縁である。向こう岸に着くのは果である。船がなくては向こう岸に着くことはできない。船があつても、風の縁がなければ、やはり向こう岸には着けない。着くことはできない。これを因縁和合というのである。この歌は武庫の山風を縁とみなして詠んだものである。

仏になろうとするには、まず因を行い、そして縁の助けがなくては、仏果には到達できない。修行という因を積んで、縁の助けを得て、後に果としての覚を得るのである。

第九は、如是報についてである。報いということは、この世によいことをすれば、来世によい報いが来るし、悪いことをすれば、悪い報いが来る。善因によって善果を得、悪因によって悪果を得ること、響きが声に応じ、影が形によりそうようなものである。一生のうちに行つた因が、その一生が終わった後に果を得ることは当然である。

現在の因が現在の果となり、過去の因が現在の果となり、さらには現在の因が未来の果となるというように、前世、後世にわたつて、遅かれ早かれ、巡ってくるのである。また、因と果とは同時だともいわれる。花を因にたとえ、実を果にたとえた場合、瓜

などは花が咲いている時、すでに実もできている。稲などは、実つた穂の上に花が咲くこともある。このようなことを、因と果が同時だというのである、

第十は、如是本末究竟等についてである。本末究竟等とは、初めの相如是から、終わりの報如是までの本末が、前後の序列をたがえず、くるりくるりと巡ることをいうのである。

究竟とは、究め極めたその究極の所をいう。十界のことは、いうまでもない。すべての生きとし生けるもの、虫けらにいたるまで、この十如是を具えていないものはない。生命のない物も同じである。

沢庵は、このことについて、

一 栗柿の実をもつてたとへ候⁽¹⁶⁾。

と栗や柿の木にたとえて語っている。栗や柿には痛みも悲しみもないというのは、人間が外から見た考えである。栗や柿のの上には、痛みも悲しみも、自然に備わっているように思われる。

草木が痛んでいる風情は、人間が痛み憂えているさまと変わることはない。水を注いでやったりして、生き生きとすると、うれしそうな風情がある。切れば、倒れこんで、葉がしおれてしまふさまは、人が病で死んでゆくのと変わりはない。

しかし、草や木は人間に対して人が草木に対すると同じように、痛みも悲しみもないと思うであろう。われわれ人間は草木のことを知らず、草木もわれわれのことを知らないのである。沢庵の草

木に対する深い愛情がこの言葉に現われている。

植物が生えている北側に壁や垣根などがあると、植物はその枝を南に片寄らせて伸びたり茂ったりするのを見れば、植物に目はないが、障害物をよける性能があることがはっきりわかるのである。以上のように、沢庵は人間の善悪の因果や、迷いと悟りの世界について説いてきたが、人間の死や死後の世界を如何に考えていたであろうか。

五 死生観 — おわりにかえて —

最後に、沢庵の死生観について見ておきたい。『玲瓏集』において、

中有と申すは、今此現有に物おもふことくに、少もかはる事候はず。かるがゆゑに、今此現有をもと申候。現在の有、はて候へは、中有と申候。また中有てんじて身をうけて出候へは、後有と申候へは、いづれも今の此身ある時の心に、少もかはる事なく候(17)。と
いつている。

人が死んで、次の生を受けるまでの暫定的な期間を「中有」という。これは、死の瞬間の「死有」と次の生の「生有」までの中間であるといわれている。沢庵は、中有というのは、この現世に生きて物思うのと少しも違うことがないという。現在の生が尽き

果てると、中有というが、中有が転じて新しい身体をうけて生まれると、これを後有（死後の生存）というのであるから、どちらも今世のこの身がある時の心に、少しも変わることはない。

さらに沢庵は、中有状況について次のように述べている。中有にも身体はあるが、あまりにかすかなために、人の目には見えない。執着の強い人の中有は、人に見えることが世にはままたあるが、世の常のことではないので、人々はこれを疑い、ある人は狐が狸が化したのだともいい、またある人は、幻覚で死者の姿を見たのだろう、などというのである。

もちろん、そのような二つの場合もあるが、すべてがそれだけではない。幻覚でない不思議なことも、世の中にはあるものである。人々がただ語っているだけでなく、正しい智慧の人が書き残しているものもある。

沢庵は、中有の状況を知るためには、夢の例を考えればよいと次のようにいつている。

夢の中で物を見るととき、この肉眼で見え、この耳で聞こえるわけではないのに、ありありと人にも会い、その人たちに物を言い、物の色も見、さらには男女の交わりなど、日ごろ強く望んでいるものを相手に、今にも思いを遂げられそうになって、目が覚めるということがある。

覚めてはじめて、夢であったかと気づくのであって、夢を見ているうちに、これは夢だ、事実ではない、などとは少しも思わな

いのである。夢というのは、まだこの身が生きていて、この身が縛り付けられているために、行きたい所へも行くことができぬ、そこで念力でもって、その場所をこちらに引き寄せて見るのである。本当に死んでしまえば、自分の身を離れているので、行きたい所へ行くのは、自由であり、思いは夢の中の思いと同じく、好きなところへ自由に行くことができるのである。

中有に生きる霊体は、深い闇の中でも、と障子を閉めた中へも、自由に入っていく。形がないからである。形はあるにはあるけれども、肉体ではないので、水に映る影、灯や月などの影のようなものであるから、物に阻まれることがない。

生きているうちは、肉体が関所となつて奥深いところに入ることができないが、中の者と心が通じるように、鉄壁でさえ通るのは念力なのである。

釈尊や祖師方は、このことを悟られたが、世間一般の人はこれがわからない。わからないから疑うわけで、愚かな上にも愚かなことである。

自分の知らないことが、どれほどあるかわからないのに、自分の知らないことは、全て存在しないことだと自分本位の考えに立つならば、例えば百のうちのうち六つか七つしか知らない者が、それ以外のことをいわれて、それはすべてでないのだというならば、残りの九十は皆存在しないことになるのではないか。

沢庵はさらに中有について、

中有五根なしと承候⁽¹⁸⁾。

という。中有は現世に生きている五根を、第六識に移してゆくのである。五根の形のないところにも、五根の性能はあるのである。この第六識は意識だから、意識に形はないが、見たり聞いたりする性能はあるので、夢の中で肉眼や内耳の助けを借りなくても、他の形を、見たり聞いたりすることができるのと同じである。

したがって、中有では五根がなくても、五事を知ることができないのは、この現在生きているのと変わることがない。外から見えないだけである。本人から見れば、現世と同じである。あまり微かになるので、見えないだけである。薄くてはつきり見えない形だから、中有を人は見ることができないのである。中有はいつも生きていた時のように、生きている人を見るのだが、生きている人はこれを知ることができないのである。

罪障、すなわち悟りを妨げる罪の行為の深い中有は、形が現われるものである。人はこれを見て、幽霊などという。執着心が深いと、形もはつきり現われるものなのである。中有でも、執着心が深ければ、形を現わすものである。薄いものは、空気と同じだから、人には見えない。人には見えないけれども、霊体はこちらを見ているのである。

現世にあるものは形があるので見ることができ、中有は形が微かなので、こちらからは見えない。宋の法運が著した『翻訳名義集』に、これを麦粒に喩えて、

麦一つには、はへ出で、本の麦粒と成る可き徳用はそなへたれども。水土と和合せざれば、麦とはならぬなり⁽¹⁹⁾。

といっている。麦一つには、芽を生やし、生長して、元の麦粒となる性能が備わっているのだが、水や土と和合しなければ、決して麦とはならない、ということである。

これを人間についていえば、人間の識と、それに応ずる境すなわち対象とが和合して、様々の念を生じ、念から次々に念を生ずるのであり、この念にひかれて、この形ある身をうけて生まれたのである。

始まりのない一念に始まって、このように千差万別の現象が現われてくる。その根源をどこまでも訪ねて行けば、そこにあるのは無始の一念であって、何の根源もない。根源はないが、そこから千差万別の現象が現われてくるのである。

人の死について深く考えた沢庵は、『東海夜話 上之巻』において、

天命は一盞の灯油の如し。誰も見て誰もこれを知らず。人の身は器なり。油を受ける盞の如し。油尽れば火滅す。油は天命の如し。天命尽くるときは人死す⁽²⁰⁾。

という。すなわち人の身は器、油を入れる盞のようなものである。油がなくなれば火が消えるという。油は天命なのである。天命が尽きれば死ぬ、というのである。

この天命は、誰も知ることができない。人間は、自らの死を知

ることができないのである。しかしながら、人の死を無常というだけでは、割り切ることができないのもまた人間であるといえよう。

註

- (1) 沢庵『玲瓏集』、一二頁。沢庵和尚全集刊行会編『沢庵和尚全集』卷五所収、昭和四年。
- (2) 沢庵『玲瓏集』、五―六頁。
- (3) 沢庵『東海夜話 上之巻』、一頁。沢庵和尚全集刊行会編『沢庵和尚全集』卷五。
- (4) 沢庵『東海夜話 上之巻』、二頁。
- (5) 鈴木正三『反故集』、三〇―三二頁。『日本古典文学大系 83 仮名法語集』所収、昭和三九年、岩波書店。
- (6) 沢庵『東海夜話 上之巻』、二頁。
- (7) 鈴木正三『反故集』、三〇―一頁。
- (8) 同前。
- (9) 沢庵『東海夜話 上之巻』、二頁。
- (10) 鈴木正三『反故集』、三〇―二頁。
- (11) 鈴木正三『反故集』、三〇―三頁。
- (12) 沢庵『玲瓏集』、一四―一五頁。
- (13) 沢庵『玲瓏集』、一六頁。
- (14) 宮本武蔵『五輪書』、三七五頁。『日本思想大系 61 近世芸道論』

所収、昭和四七年、岩波書店。

- (15) 沢庵『玲瓏集』、一八頁。
(16) 沢庵『玲瓏集』、一九頁。
(17) 沢庵『玲瓏集』、二二頁。
(18) 沢庵『玲瓏集』、二四頁。
(19) 沢庵『玲瓏集』、二六頁。
(20) 沢庵『東海夜話 上之卷』、七九頁。

(かさい・あきら 福島工業高等専門学校教授)